

子どものすきな神さま

新美南吉

青空文庫

子どものすきな小さい神さまがありました。いつもは森の中で、歌をうたったり笛ふえをふいたりして、小鳥やけものと遊んでいましたが、ときどき人のすんでいる村へ出てきて、すきな子どもたちと遊ぶのでした。

けれどこの神さまは、い子どもすがたをみせたことがないので、子どもたちにはちっともわかりませんでした。

雪がどつきりふったつぎの朝、子どもたちはまつしろな野っぱらで遊んでいました。するとひとりの子どもが、

「雪の上に顔をうつそうよ。」
 といいました。

そこで十三人の子どもたちは、腰こしをかがめてまるい顔をまつしろな雪におしあてました。そうすると、子どもたちのまるい顔は、一列れつにならんで雪の上にうつったのでした。

「一、二、三、四、……」

とひとりの子どもが顔のあとをかぞえてみました。

どうしたことでしょう。十四ありました。子どもは十三人しかいないのに、顔のあとが

十四あるわけがありません。

きつと、いつものみえない神さまが、子どもたちのそばにきています。そして神さまも、子どもたちといっしょに顔を雪の上につしたのちにちがいありません。

いたずらすぎの子どもたちは、顔を見あわせながら、目と目で、神さまをつかまえようよ、とそうだんしました。

「兵隊へいたいごっこしよう。」

「しようよ、しようよ。」

そうして、いちばんつよい子が大将たいしょうになり、あとの十二人が兵隊へいたいになって、一列れつにならびました。

「きをつけッ。ばんごうッ。」

と大將たいしょうがごうれいをかけました。

「一ッ。」

「二ッ。」

「三ッ。」

「四ッ。」

「五ツ。」

「六ツ。」

「七ツ。」

「八ツ。」

「九ツ。」

「十ツ。」

「十一ツ。」

「十二ツ。」

と十二人の兵隊へいたいがばんごうをいってしまいました。そのとき、だれのすがたもみえないのに、十二番目の子どものつぎで、

「十三ツ。」

といったものがありました。玉をころがすようなよい声でした。

その声をきくと子どもたちは、

「それ、そこだツ。神さまをつかまえろツ。」

といつて、十二番目の子どものよこをとりまきました。

神さまはめんくらいました。いたずらな子どものことだから、つかまったらどんなめにあうかしれません。

ひとりのせいたかのつぽの子どものまたの下をくぐって、神さまは森へにげかえりました。けれど、あまりあわてたので靴をかたほう落としてきてしまいました。

子どもたちは雪の上から、まだあたたかい小さな赤い靴をひろいました。

「神さまはこんな小さな靴をはいてたんだね。」

といてみんなで笑いました。

そのことがあってから、神さまはもうめつたに森から出てこなくなりました。それでもやはり子どもがすきなものだから、子どもたちが森へ遊びにゆくと、森のおくから、

「おおい、おおい。」

とよびかけたりします。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：鈴木厚司、もりみつじゅんじ

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子どものすきな神さま

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>